

コラム 67— ソ連スパイが日米開戦に果たした役割

冷戦史に詳しいハンガリー生まれでユダヤ人の母を持つアメリカの歴史学者ジョン・ルカーチは、「ソ連スパイが日米開戦に果たした役割」と題して、次のように断言しています。

「1941年において、天皇および少なくとも日本政府の一部が、対米戦争回避の真摯な希望を持っていたことは、疑いない。ルーズベルトはかつてホノルルでの近衛（首相）との会談を拒否したが、11月20日前後には情勢は切迫しており、日本側のいわゆる『提案B』（乙案）とアメリカ側がすでに用意していた暫定協定案はそれほど遠いものではなく、両者の妥協が可能のようになっていた。ところが11月20日と25日の間に、ワシントンはこの暫定協定案を日本に示さないことに決定した。それに代わって、11月26日に日本側に示された案（ハルノート）は、原則上は非の打ち所がないものであったが、日本政府が受諾する可能性は殆どないものであった。というのも、それは日本が過去10年間に獲得した全てのものを吐き出させるものだったからである。アメリカ側がこのような急展開した動機は未だ不明瞭なところがあるが、ここに蒋介石の友人、支持者、ロビイスト、スパイなどがきわめて重要な役割を果たしていた。当時蒋介石の下にあって、ルーズベルト大統領の代表を務めていたオーエン・ラティモアが、これに関わっていたのは間違いないところである。」

ここに出てくるラティモアは、ホワイトハウスでルーズベルト大統領の中国問題担当補佐官を務めていたロークリン・カリー（ベノナ文書から100%ソ連のスパイと確定）の盟友です。そして、このカリーが、米政府内の強い反対を押し切って、ラティモアを蒋介石の顧問に任命し中国に派遣したのです。

もしこの時期に、日米交渉が妥結していたら、国共合作によって成立し抗日戦を戦っていた重慶政権が、崩壊する危険がありました。

当時、重慶のラティモアからワシントンのカリー宛に、次のような切迫した電報（11月25日付）が届いています。

「胡適（中国駐米）大使とハル国務長官との会談について、蒋介石総統と話し合いました。どうか早急に総統の（日米交渉妥結への）極めて強い反対を大統領にお伝えください。総統がこんなに興奮したのを、私は見たことがありません。対日経済制裁の緩和とか資産凍結の解除とかは、中日戦争の日本を軍事的に助けるもので、はなはだ危険な措置です。日本軍が中国に駐留するままで、対日圧力を緩和するなどということは、中国人を唾然とさせるでしょう。・・・中略・・・ここで中国人がアメリカに棄てられたと感じたならば、過去の援助も、未来の援助の増大も、その幻滅を償うことはできません。日本が外交上の勝利によって、軍事的敗北を免れるようなことがあれば、中国人のアメリカ人への信頼は地に墜ち、さしもの総統も状況を掌握できなくなるでしょう。これが私の警告です。」

このように、ソ連スパイで大統領補佐官であったワシントンのカリーと重慶のラティモアが、それぞれの役割を分担して、ルーズベルトと蒋介石に強力に働きかけ、土壇場での日米交渉妥結を、必死になって阻止したのです。これに「ハルノート」の起草者であったハリー・ホワイトが絡んできます。すなわち、日米開戦には、カリー、ラティモア、そしてホワイトというソ連ないし中共工作員の活動が、決定的に絡んでいたのです。

20世紀の戦争を論じるとき、インテリジェンス（国家情報あるいは諜報）の分野を視野の外において、論じることが到底できません。そして、インテリジェンスの営みこそが、通常の軍事や外交のそれを超えて、戦争の主要な決定要素であり、それは戦争に至る経緯や、戦争責任の評価、戦争をめぐる歴史観そのものにもかかわり、歴史叙述においても常に大きな位置を占めます。